銀の狐と狐火の謎

一　銀狐

幻想郷の湖畔に建つ紅い建物――紅魔館。その門扉のところに一人分の影がある。
この館の門番を任されている紅美鈴だ。紅い長髪に翠色の中華風衣装を纏った女性。しかしながら彼女は長身の割に威圧感は無い。柔和な顔立ちで、どこか力の抜けた振る舞いのせいだろう。良くも悪くも警戒心を抱かせない雰囲気がある。
いや、門番として警戒心が見えないというのはどうだろうという疑問はあるが……。
そんな彼女が隣にいる存在に話しかけた。
「さて、これからどうしましょう？」
美鈴は視線を落として問いかける。
長身な彼女であれば大抵の者を見下ろす形になるけれど、それにしては視線が下に向きすぎている。
それもそのはずで、話しかけられた者は美鈴の膝程度の高さにいるからだ。
『どうって……どうしようかしらね……』
隣にいた者が答えにならない答えを返す。

そもそもの話、答えが返ってきた――その言葉が聞こえる時点でおかしい。
なぜなら美鈴の足許にいるのは、綺麗な毛並みをした銀狐だったからだ。
門のところにある人影は一人分。けれど動物の影も一つ。都合二つの存在が途方に暮れている。
「うーん……とりあえず何か買う物とか揃える物が必要ですかね、咲夜さん？」
『私に聞かないでよ。知るわけないじゃない』
「いやでも自分のことじゃないですか」
『好きで狐になったわけじゃないわよ』
話しかけられた狐――咲夜と呼ばれた彼女（？）は、他人事のように言う。
他人事というか、自分の事と認めたくないのだ。
まさか、狐になるなんて。
自分が二足ではなく四足で地に立っていることなど信じられるはずがない。
そんな意識が咲夜の中にまだあるのだから。
そう。彼女――十六夜咲夜は狐になってしまったのだ。元々は人間だった。それも、この紅魔館の生活を取り仕切るメイド長だったのだ。
確かに幻想郷には妖怪やら人獣やら色々居るけれど、れっきとした人間だった彼女がどうして完全なる狐の姿形になってしまったかというと。

話は一時間前にさかのぼる。
いや、それは咲夜にとっての話で、そもそもの発端は一週間前のこの館の主とその友人との会話から始まるのだった。

「ねえパチェ」
「……なに？」
「耳っていいわよね」
「……何を考えているの、レミィ」
パチュリーは話しかけてきた友人――レミリアに怪訝な視線を向ける。
大図書館にていつものごとく読書に耽っていたところ、大股開きでどかどかとレミリアが入ってきたのだ。
パチュリーの反応がやや鈍いのは読書をしながらで意識が散漫だから……というわけではなく、嫌な予感がしてあまり突っ込んでいきたくないのだ。
「なに？　耳フェチにでも目覚めたの？　自分のでも触っていたらいいじゃない。綺麗よ、あなたのその形のいい耳」
今度は口早にまくし立てる。〝そういうこと〟にして話を切り上げてしまいたいのだ。

それにしてもさっきから言葉の先頭に〝なに〟ばかり付けているな、と場違いにも自分の語彙力の無さを痛感するパチュリーだった。それこそ日頃の読書や研究で膨大な知識や理論が頭には入っているけれど、それと比べて実践の機会が極端に低いせいでうまく引き出せていないのだ。

「違うのよ！　耳よ耳！　ケモノ耳！」

「ケモノ耳？　だったらそこらへんの動物でも連れてきて撫で回していたらいいじゃない。わざわざそんなことを言いにきたの？」

「分かってないわね。そんなのはただの獣よ」

「だから獣の耳なのでしょう？」

「違う違う。これよこれ」

そう言ってレミリアが差し出したのは一冊の本だった。本と言うにはあまりに薄く、冊子と言った方がよさそうなもの。

ここを見て、とレミリアが開いたページにはメイドの格好をした一人の女性が描かれていた。手書きというにはひどく整った線や模様がふんだんに使われていて、どのような技術が用いられているのかよく分からないが、美麗なイラストではある。

「これどうしたの？　幻想郷の本じゃないわよね？」

「この前久しぶりに咲夜と香霖堂に行ったらあったのよ。だから多分、外の世界の本なんじゃ

ないかしら」
「まぁ、そうよね。幻想郷には無さそうな技術で作られているわ。そもそも、何でこれを買ったのかっていう疑問があるのだけど」
「その理由がコレよ！」
と、再びレミリアは開いたページを指さす。
先ほどケモノ耳が良いと言った理由とも繋がっているらしきページ。
パチュリーがもう一度見てみれば、そこに描かれていたメイドの女性には耳が付いていた。人間の耳だけではなく、頭の上部にケモノのものらしき耳が二つ。
（これ、本物？　耳が全部で四つあるわね……。突然変異かしら。いえ、合成獣（キメラ）の一種？　外の世界じゃ随分と洒落たことをやっているのね）
一枚のイラストから思索の海に潜っていくパチュリー。この集中力は魔法使いならではのものなのかもしれない。
「ねね、これを咲夜でやったらいいと思わない？」
「思わない」
「思うわよね！」
「思わないわ」
「何の耳がいいと思う？」

「いや、どれもいいと思わないわ。そもそも咲夜にはもう、ちゃんと人間の耳があるじゃない」
「あの子の髪の毛に合う色がいいわよね」
「だから話を進めないで！」
必死にやらない方向で否定しているのにレミリアはそれこそ、その頭に付いているのは飾りの耳かと言いたくなるほど聞く耳を持たない。
思わないではなく、やらない。
そうなのだ。この件でレミリアに同意してしまっては、自分に火の粉がかかることをパチュリーは分かっていた。
人間に勝手に獣の耳が生えてくるわけがない。となれば魔法なり秘薬なり、それこそこのイラストの合成獣のように儀式なりの外的要因を与えなければならない。
それを「やれ」と、レミリアは絶対に言ってくる。絶対にだ。
「パチェ、ここはやっぱり咲夜の銀髪に併せて銀狐なんか良いと思うの。どことなく気品もあるじゃない？　私の従者にぴったりな耳だと思うのよ」
ほら来た、と内心でため息を漏らす。
それになんだ従者にぴったりな耳って。服やアクセサリーではないのだ。
「じゃ、お願いね！　パパっとできるでしょ？」

「はぁ……結局断り切れなかった……。とりあえずやってはみるけれど、初めてのことだからうまくいくかは……」
「パチェなら大丈夫よ」
その自信はどこから来るのだ、と思いつつも友人にここまで信頼され、お願いされてはこれ以上無碍（むげ）にも出来ない。
とりあえずやるだけはやってみようと、パチュリーは図書館の奥に参考書を探しに行くのだった。

こうしてパチュリーの手間と時間と苦労とストレスの果てに完成した物が、いまレミリアの前に置かれている。それは粉末状の秘薬だった。
「ついに完成したのね！　さっそく咲夜に飲ませてこよう」
「ちょっと待ったレミィ。咲夜がそのままほいほいと飲むわけないでしょ。頭のいいあの子のことだから一瞬で何か裏があると見抜いて警戒してくるわよ」
「そうだったわね……頭のいいメイドは扱いづらいわね、まったく」
「そのおかげで今の紅魔館があるところには目を瞑るのね……」
親指の爪を噛みながらどうしようかと悩んでいるレミリアを見て、パチュリーはため息を一つ吐く。この一週間、自分にだけ働かせてないでその辺りの算段でも立てておいてくれれば良

かったのに、と。
「分かったわ。この薬を咲夜に飲ませる手筈はこちらで整えるから、あなたは大人しくしてて」
「さっすがパチェね。紅魔館は優秀な人材ばかりで嬉しいわ」
つい先ほど、その優秀な人材を疎ましく思ったのではなかったか。
とりあえずパチュリーは小悪魔を呼んで計画に巻き込むことにした。

「悪かったわね、咲夜。本の整理を手伝わせてしまって」
「いえ。ですが珍しいですね。いつもは小悪魔だけで事足りていたはずですが」
「この前ちょっと本を買いすぎてしまって。おかげで助かったわ」
「このくらいでよければいつでもお呼びください。では私はこれで――」
「ああちょっと待った。いま小悪魔に紅茶を淹れさせているから飲んでいったら？」
「そんな……これくらいで気を遣われては」
「ほら、もう用意が出来たみたい」
パチュリーが視線を向けると、小悪魔がトレイにカップを乗せて持ってきた。
「お待たせしました～。アイスティーにしましたけど良かったですか？」
「ありがとう。さ、咲夜も」

「……仕方ないですね。せっかく用意していただいたみたいですから、一杯だけいただいていきます」
「咲夜さんに手伝っていただいて、と、とぉーっても助かっちゃいました。あはは……」
小悪魔が引きつった笑いを浮かべているのが若干気にかかりながらも、咲夜は冷たい紅茶を口に含んだ。早々に立ち去るつもりなのか、普段から優雅な所作の彼女にしてはいささか早い飲みっぷりだ。
そうして小悪魔が持ってきてから数分と経たず咲夜のカップは空となった。
「それでは私はこれで。紅茶もありがとうございました。小悪魔、美味しかったわ。妙な雑味があったけれど」
咲夜が口元をハンカチでそっと拭い、立ち上がる。
「よく気づいたわね」
「え？」
パチュリーが呆れと感心を半分ずつ混ぜながら咲夜に話しかける。何のことだと咲夜は聞き返す。
「無味無臭にしたはずなのだけれど……やっぱり初回じゃまだ詰め足りてなかったか」
しかしパチュリーは自分の思考に入ってしまって答えは返ってこない。
それでも言いしれぬ不安に襲われた咲夜は訊き返さずにはいられない。

「何か混ぜていたのですか？」
「う～ん……次は液体タイプにするべきかしら……」
やはり返事はない。埒があかないと思い、今度は運んできた小悪魔の方を見る。
「ひぅっ」
無意識の内に睨むかたちになってしまったのか、咲夜の視線の圧に竦（すく）むようにして小悪魔が戦慄（わなな）いた。
「小悪魔。説明してちょうだい。何を入れたの？」
「ええっと、それは紅茶を……」
「私が訊いているのは〝淹れたもの〟ではなくて〝入れた物〟よ。分かってるわよね？　説明させないで」
「あうぅ……それはぁ……」
咲夜の中ではもう、良くない物が混入されたと確定している。小悪魔がこうやって怯えながら言葉を濁していることからもそれは明らかだ。
おおかた、パチュリー様かお嬢様あたりにでも命令されたのだろう。そうして私にまで詰問されている。可愛そうだとは思うが、いま答えられる者はこの子しかいないのだから仕方がない。そう思っていると、
「はっはっは。飲んだわね、咲夜！」

「お嬢様……」
二階の通路の所にレミリアが立っていた。
吸血鬼の少女はふわりと一旦浮かびあがり、その黒い翼をはためかせながら降りてきた。
「やはりこれはお嬢様の陰謀だったのですね」
「陰謀だなんて人聞きの悪い。ちょっとした実験よ」
「人を安易に実験台にしないでくださいませんか」
「いやあ仕込みの段階からわくわくしっぱなしよ。小悪魔がこう、飲み物に薬を混ぜるのを見てニヤニヤが止まらなかったわ」
「聞いてないし……」
ここの住人は一度耳鼻科にでも行って聞く耳というのを取り付けてもらうべきなのではないかと思う。
「で、何を入れたんですか？」
「ふふふ、それは言わずともすぐに分かるわ。……たぶん」
「たぶんって」
「だって作ったのはパチェだもの。どのくらいで効いてくるのかは私には分からないわ」
妙にわくわく自信満々かと思いきや、片やよく分かっていない部分もある。相変わらず大ざっぱな主である。

どうせやりたいことだけパチュリーに告げてあとは任せきりだったのだろう。そう予想した咲夜の考えは見事に当たっていたのだけれど。

ただ一つ。この場の誰もが予想し得なかった事態が起こった。

「……っ、なに……。指が、いえ……全身がなんだか……」

「おっ、きたみたいね。ん、全身？　頭とか耳とかじゃなくて？」

咲夜が苦しそうな吐息を漏らす。何かに耐えるような苦悶の表情と潤む瞳。上気した頬。その様はどこか艶めかしくもあるけれど、当の本人にしたらたまったものではない。

主とその友人が共謀して盛った何か得体の知れない薬が自分の中に入り込んで、身体に変調をきたしているのだ。流石に死ぬとまではいかないだろうが、強烈な不安感との戦いでもある。

「始まったみたいね。どうも様子がおかしいけれど」

「ちょっとパチェ、失敗じゃないの？」

「たぶん、そうね」

咲夜の苦しむ声にこっちの世界に返ってきたのか、パチュリーの声も聞こえた。とても聞きたくない言葉だったが。

そうして一分か二分。咲夜からしてみれば一時間にも二時間にも感じる時間を苦しんだ後、不意に体中から綺麗さっぱり全ての不快感が消え去った。

――何だったの？

「ちょっと、どうするのよこれ。耳どころのさわぎじゃなくなったわよ」
「調整に失敗したみたい」
上から声が降ってくる。
おかしい。レミリアの身長は咲夜よりも低いのに。苦しんでいる間に飛んだりしたのだろうか。
そう思って上を見上げ、下を見る。
下を見た瞬間、何か見慣れないものが見えた。
――足？
自分の足ではない。と、そう思うのだが、なぜか断定できなかった。
犬か猫のようにほっそりとした足に付いた大量の銀毛。その動物の足を、自分の意志で動かせてしまう。
もう一度咲夜は全身を見回した。
――動物？
咲夜の聡明な頭脳はすぐにその答えを弾きだす。けれど、理性がそれを認めない。
けれど、否定できる要素も見あたらず、現実と感情の狭間で咲夜が取った行動は。
『きゃあああああああああああ！』
錯乱して逃亡することだった。

大図書館に銀狐の遠吠えが木霊した。

「ふんふんふふーん」

美鈴は屋敷の庭を歩いていた。今日は珍しく咲夜に怒られることもなく、気分もいい。このまま庭の水やりでもしてしまおうか、と思っていた時。

「ん？　なんだろ、あれ」

どうも大図書館の方から一匹、動物が走ってくる。

「おおおお。どうしたーおまえー」

走ってきた狐を抱き上げる。

よほど全力で走ってきたのか、ハッハッと息が荒い。

「ううん？　どうしてこんなところに狐がいるんですかね……。咲夜さんが新しく飼い始めたのかな？」

『咲夜』の単語に反応して狐が一度吠えた。

「そうかそうか。やっぱり咲夜さんかー」

こん、ともう一度吠える。

狐――咲夜はもどかしく思い、その後も何回か吠えた。

違うの美鈴。咲夜が、なのではなく、咲夜なの、と――。

しかし動物の言葉が通じるはずもなく、美鈴はにこにこ笑顔。
「咲夜さんもだめだなぁ。ちゃんと首輪とか付けてあげないと。野良だと思われちゃうのに。ここは、たまにはビシっと私の方から言ってあげねば！　確か今日は図書館で小悪魔さんの手伝いとか言ってたよな……行ってみましょうか」
美鈴はぎゅっと抱いたまま、たったいま狐が走ってきた方向に歩き出す。
しかし狐は戻りたくないとじたばたと暴れるのだけれど、
「そうかそうか、おまえも咲夜さんに会いたいかー」
と、致命的にズレた言葉を漏らし、有無を言わさず連行する。
どれだけ暴れようとも美鈴の――妖怪としての力を解けるはずもない。
はっはっはと陽気な笑い声と共に、咲夜は再び大図書館に戻るはめになった。

「えええええええええ！　これっ、咲夜さんなんですか!?」
図書館の中に居たレミリアとパチュリーに説明を受けた美鈴は信じられないと大声をあげた。
パチュリーと狐――咲夜の間で忙しなく視線を左右させている。
咲夜が図書館から逃亡した後、どうしようかと思っていたところで都合良く美鈴が連れ戻してきてくれた。
もちろん美鈴が事情を知っているわけもなく、咲夜を探しに来ただけだったのだが、その旨

をレミリア達に伝えると、
「なに言ってるの。あんたがいま抱えているのが咲夜よ」
と、さらりとトンデモ展開を言い渡されたのだ。
「ど、どど、どうしてこんな姿に……」
「そうね、やはり咲夜の声が聞こえないというのは不便よね……」
「いやいやパチュリー様、私の話を聞いてください」
「ちょっと待ってて。確か動物の声を理解できる首輪があったはずだから持ってくるわ」
「そんなのあるんですか!?　って、だから私の疑問に答えてくださいってば！」
相変わらず人の話を聞かない住人である。
それから数分後、けほけほと咳をしながらパチュリーが戻ってきた。恐らく長らく使っていなかった道具箱でもひっくり返して埃にでもやられたのだろう。
はい、と言って美鈴は一つの首輪を受け取った。
薄い水色で、少しばかり金属光を放つ首輪だった。外見や形状に拘って作ったのか、正直人間用にチョーカーとしてもいいくらいの一品だ。
「いい首輪ですね。じゃあこれを咲夜さんに……っと」
「何やってるの美鈴」
「へ？」

「誰が咲夜に付けてなんて言ったのよ」
「え、だってこれで言葉が話せるようになるんじゃ」
「私はさっきこう言ったはずよ。『動物の声を理解できる首輪』って。さて問題。この場合、理解するのは我々の方かしら？　それとも動物の方かしら？」
「そりゃあ、動物のっていうくらいなら、私たちの方じゃ――ってまさか！」
「そ。付けるのはあなたの方よ、美鈴」
それでか。道理で人間が付けても良さそうなデザインかと思ったら、人間用でしたか。正確には人間ではなく妖怪だけれど。
あっはは～と苦笑を浮かべるも、どうも空気的に「じゃ、そういうことで」と退散できそうもない。
観念して美鈴が大人しく自分の首に首輪を付ける。すると――
『あほ美鈴』
「ふぇ!?」
狐の方から咲夜の声がした。いやそもそも狐が咲夜で咲夜が狐で。とにかく咲夜の声がするのは当然で。動物なのに声が聞こえて当然ということもないのだけれど。とにかく、なんかすごい！　言葉が分かる！
『なあにがたまにはビシっと言ってやらなきゃ、よ』

「ひえええー、聞こえてた！」
『あんだけ自信満々に喋ってれば聞こえるっていうの』
「ひどいですよ！　咲夜さんなら咲夜さんって言ってくれないと！」
『言ってたわよ！　聞こえてなかったのはそっちでしょ！』
泥沼化しだした責任の擦（なす）り付け合いが始まった。
端から見れば狐が吠え、美鈴がその狐に向かって言葉を投げかけているという光景だ。「とりあえず言葉は聞こえているようね」
「あ。これって私にしか聞こえてないのか」
「そうよ。それは装着した者のみの、一人用の翻訳機だもの」
「うぅ……それじゃあ私って狐と張り合ってただけの痛い子に見えていたんじゃ……」
「痛々しかったわね」
「痛いを二つ繋げないでくれます!?」
自分の客観的な姿を理解したようで、顔を紅潮させながら凹む美鈴だった。
「ま、これで多少の不便は解消されたでしょう。ということでしばらくお願いね、美鈴」
「へ？　パチュリー様、それってどういう……？」
「流石にずっと咲夜をそのままにしておくわけにもいかないでしょ。レミィ？」
「まあそうね。咲夜が働いてくれないと紅魔館は成り立たないし。それにこれじゃあ当初の目

的と違っているもの」
『当初の目的じゃない……？　いったい何をさせるつもりだったのかしら』
咲夜が呟くも、当然それは美鈴にしか聞こえない。
「ええっと、そういえば咲夜さんを狐にするって何か目的があったんですか？」
だから、代わりに美鈴が訊くのだけれど。
「それは秘密ね。想像してしまったら実物を見た時の感動が減ってしまうわ。そんなのもったいないじゃない！」
「そんなに大層なものかしら……」
未だに狐耳咲夜の夢を捨て切れないのか、レミリアは詳しくは説明しなかった。
「とりあえず、私は咲夜を人間に戻す薬を作るからそれまで面倒を見ていてあげなさい。いくら咲夜でも動物の身体じゃ不便が多いでしょう。それまでメイドの仕事もお休み。で、いいわよね、レミィ？」
「仕方ないわね。そういうことで」
いつの間にか拾った狐……じゃない、咲夜さんの面倒を見ることになってしまった。
そんなの十何年ぶりだろうか。
人間と動物の違いはあるけれど、昔みたいに自分の方がちょっとお姉さんの立場に戻ったみたいに感じて、ほんのり楽しみな気分になる美鈴。

そんなこと言ったら咲夜が怒りそうなので敢えて言いはしなかったけれど。
「あのぅ……ちなみに薬って、作るのにどのくらいかかるんですか？」
「さぁ。神のみぞ知る、といったところね」
冗談なのか本気なのかよくわからない、いつもといえばいつも通りの平坦な口調で返されてしまった。
さて、これからどうしよう？

時間は現在に戻る。
咲夜狐化現象にまつわる顛末があったのが一時間前。
それから二人はひとまず図書館から紅魔館へ移った。咲夜が「この身体でどれくらいのことが出来るのか試したいの」と言ったせいだ。
その結果、恐るべき慣れの速度と言おうか。最初こそ身体の動かし方がぎこちなかったものの、しばらくすると元人間とは思えないほど様々なことをこなせた。
いや、元人間だったからこそ、そして咲夜だからこそ、身体の構造から動かし方、応用の仕方、注意点などを素早く的確に把握できたのかもしれない。
狐の身体には重すぎる物や、あまりに高いところにある物以外は持ち運べるようになったし、扉の開閉なども問題なかった。

「これ、私が面倒を見る必要あるのかなぁ……」
『流石に全部を以前のようには無理だから。それに出来るからと言って身体の負担になってないとも限らないしね。ある程度は頼むことになりそう』
「まあ、咲夜さんに頼られる機会なんて滅多にないのでそれはそれで大歓迎ですよ。なんでも言ってくださいね」
美鈴は思いのほか嬉しそうに言う。その笑顔があまりにも楽しそうで、本当に嬉しそうだったから。何気なく言ったはずなのに咲夜の方が妙に意識してしまい、照れてしまう。
『……ばか』
「え？」
『なんでもないわ』
美鈴が動物の表情を的確に読めるとは思わなかったが、顔を見られたくなくてそっぽを向きながら悪態をついた。今ばかりは動物で良かったかもしれない、なんて思いながら。

そうして一通りの確認を済ませてから二人は紅魔館の門のところまで来た。
どうするべきか、と話し合った結果。
『やっぱり私の行動自体はなんとかなっても、ちょっとした買い物は必要かもしれないわね。元に戻る薬が完成するのもいつまでかかるか分からないし』

「そうですね。衣・食・住、全部変わってくるのかな」
『食は変わるかもしれないわね。まだ何も食べてないから分からないけれど、消化器官まで丸ごと狐と同じになってるなら人間用の食べ物ばかり食べてたら体壊しそうだし』
「住は問題なさそうですかね。私もフォローしますし、だいたい出来てましたし」
『寝たりとか大丈夫なのかしら……ベッドに毛とか落ちそうなんだけど』
「あー……どうなんでしょう。寝具も買っておいた方がいいんでしょうか」
『毛布の一枚でも見繕いましょうか』
「あと残すは衣ですよ！」
『動物に衣類は必要ないでしょ』
「でも咲夜さん。普通に人間の意識で言ったら、いま素っ裸ですよ？」
『――ッ』
美鈴に指摘されて気づいた咲夜はびくりと体を震わせる。
どうも狐になったことで本能的な部分というか、〝かくあるべき〟というところが、だいぶ動物寄りになってしまっているらしい。
『美鈴』
「はい？　――痛っ」
咲夜はとりあえず美鈴の脛をかじっておいた。

デリカシーの無いやつめ。
とりあえずそんなやりとりをしつつ、二人は人里へと買い物に出かけた。